

Case

10

# 「肌の菌を育てる」ことで、 キレイな肌づくりをサポート

鎌倉に店舗を構える mayunowa（まゆのわ）。絹（シルク）の肌への有用性と、余分なものを加えないというこだわりを基礎化粧品、美容道具の開発という形で実現した。

事業者名: 合同会社 mayunowa 事業年度: 27年度

事業テーマ: シルクの機能性を生かした肌と環境にやさしい美容道具と化粧品の開発

## 企業概要



「絹美容」と呼ばれるシルクを用いたエステティックサロンの運営、絹美容の技術導入とコンサルティングを行うサロンコーディネート事業をこれまで行ってきた。2016年、ものづくり補助金の採択をきっかけに、自らが納得できる化粧品、スキンケア用品の企画、製造、販売に着手。現在では30種類以上の商品ラインナップを取り揃えている。

合同会社 mayunowa

代表社員 横山 結子

2015年1月

〒244-0816  
横浜市戸塚区上倉田町  
995

3名

045-392-3706

その他の生活関連サービス業



WEBサイトへ

## 取材の現場から

中小企業の化粧品製造は委託で行われるのが一般的だが、防腐剤を使わないなどの条件から委託製造するのが難しく、自社で化粧品製造を始めた当社。代表の横山氏の経験に基づく絹美容への熱意が、大学研究者との出会いや数々の新商品を生み出す原動力となっている。



▲化粧品は全て手作業で製造されている



▲代表社員の横山 結子氏



▲筆の名産地熊野で作られた美容道具

なければつくる、化粧品開発がスタート  
もともと私自身がアレルギーだったことや、エステの施術でお客様の肌の状態を見ていて疑問を感じることも多く、肌について調べていくうちにシルクという原料に出会いました。しかし、シルクを使っている化粧品を探しても、安全性の条件に合うものがなかったのです。それなら自社で製造するしかないと思い、化粧品の製造に取り組み始めました。

シルクはもともと繭（まゆ）から取れるもので、昔から成分が人間の肌と非常に近いと言われていました。最近の研究では、シルクは細胞を培養するための素地として非常に優れていることが分かっています。当社で製造している化粧品は、この細胞を培養するための素地として作られた材料を使うのが特徴です。

こだわりの化粧品は肌の常在菌バランスを整える

肌が乾燥したり、弾力がなくなるのは、角層と呼ばれる肌の表面に隙間ができてたり、薄くなってしまうのが原因です。当社の化粧品

「mayunowa シリーズ」は、この隙間を人工皮膚のように肌と一体になって物理的に埋めてくれます。従来は、乾燥といえば保湿などで膜をつくるイメージでしたが、そうではなく、隙間を埋めて中からの水分の蒸発を防ぐ、という考え方です。そうすることで、肌本来が持つ、治る力でキレイな肌、つまり肌の常在菌のバランスが整うのをサポートしてくれます。また、今回の補助事業では、繭から取れる生糸を使った美容道具も開発しました。生糸は、肌の組成とほぼ同じアミノ酸成分を持つので肌に優しいケアができます。一般的に化粧品は腐らないものというイメージがありますが、当社のコンセプトは「肌の（良い）菌を育てる」なので、菌を殺してしまう防腐剤は使用しません。当然、消費期限が短くなるため、実際に使うまでは容量が少ないようにも思われてしまします。お客様の化粧品に対する根本的なイメージを変えるための商品の伝え方が難しいです。しかし、化粧品の取り扱いを含めた絹美容を施術できるサロンも着実に増えてきています。今後は、より分かりやすく商品をお伝えすること、商品を手にとれる機会を増やせるよう販路を拡大していきたいです。